



汝が賭けし一世の業や酔芙蓉
 けらつつき星掘り出してゐるごとし
 黄泉へゆく船に白百合積みて冬
 朝を待つ理由にあなた青蜜柑
 秋蝶に刻のかそかに積もりゆく
 藻塩煮る三日三晩や今朝の秋
 さよならはへばなと言へり暮早し
 骨納めたたむふるしき式部の実
 句座十歳ひかりを緝ぎ立冬へ
 吾は山の子熊啄木鳥の顔真つ赤
 八木重吉忌一掬の秋の水
 初霜や搦めとらるる草の息
 地球より重き吾子なり雪ばんば
 冬ざれや息子は父の遺骨を負ひ

総帆展帆了はりし港深む秋

古畑恒雄
 矢島 惠
 久保美智子
 依田ひろ
 宮坂やよい
 松下勝昭
 今野晶子
 許勢元貞
 山田一政
 大澤淳基
 宮岡光子
 田中利政
 塚本回子
 小湊美津子

ホスピスの森や椎の実埋める栗鼠
 殉教者の衣のごとき蟬の殻
 十一月十一日行く雲へ愛国歌
 ゴルバチョフ忌大岩石が星になり
 炭窯の中の昼寝や外は雪
 しんしんと霧のそこひや人を恋ふ
 どっかりと牧の雲古や秋日燦
 生涯を脱落したる木の葉髪
 後の雛母とふ衣ぬぎにけり
 年の湯やシーラカンスは海の底
 重陽や琉球切子に首里の酒

*

年寄にいづこも地べた秋祭
 鱈雲夫婦はいつも弥次郎兵衛
 満月や想へばそこにあるごとし
 佃煮の蝗の足の天を指す

塩原英子
 岩井かりん
 満田光生
 芳賀佳子
 重親利行
 傳田恂子
 北村宣枝
 岩上諒磨
 添田朋子
 増田義幸
 渡嘉敷皓駄
 島田謙吉
 岩見三七夫
 牧野真知子
 松原壽美子

——同人集・岳集・青雲集から

巻頭のことば 今年二月、「岳」は創刊四十五周年を迎える。いよいよ五年後の半世紀を目指して、思いを新たに日々確かな歩みが続けていきたい。それにつけても、当面、五月に迎える四十五周年行事は「岳」の現スタッフにおける総まとめを意味するすばらしい大会にしたいと願っている。私は省みて、つねに最良の誌友にめぐまれてきたと自負し、ありがたいと思っている。岳は一人一人が喜びを分かち合い、その総決算が節目の大会に結集される。ここからそのように願っている。

一世の業——宮城まり子への追慕

汝が賭けし一世の業や酔芙蓉 古畑 恒雄

二〇二〇(令和二)年三月二十一日、九十三歳で逝去した宮城まり子さんへの追慕の句である。「ガード下の靴みがき」の歌手は肢体不自由児養護施設「ねむの木学園」を設立し、その理事長となり、寝食を共にし、小・中・高校生の障害児教育に生涯をささげた。古畑恒雄さんはその顧問弁護士としてまり子さんの活動を支えた、世にも稀な、立派な真実の人格者である。「酔芙蓉」をもってまり子さんを讃えたところにはにかむような作者の艶があり、やさしさが感じられる。「岳」が誇れるのは世の一番困難な仕事をやり続け、「感動」とは何かを常に問題提起をしてくださる俳人がいることである。

けらつつき星掘り出してゐることし 矢島 恵

高原の秋の夕方、きつつきが巢孔を穿つような音を立てている。星が光り出す。縁語表現の巧みな用い方が「星を掘る」と宙にまで及んでいるのが面白い。比喩が巧みな作者だ。

朝を待つ理由にあなた青蜜柑 依田 ひろ

どんな場面か。私は連合いではなく、息子の朝帰りを連想した。硬質なお洒落な表現がいい。じつと心配しながら肯定している。「あなた青蜜柑」の隠喩が新鮮である。

秋蝶に刻のかそかに積もりゆく 宮坂やよい

温暖化により晩秋まで蝶が元氣。それだけのことであろうが、身も蓋もないいい方ではなく、時間を生きものとしてこんなやさしい表現をされると、「いのち」の大切さをしみじみと感じる。やさしさが身についている出色な作者である。

藻塩煮る三日三晩や今朝の秋 松下 勝昭

作者は料理の専門家。生きる上で大事な塩への関心をお持ちなのが、さすがと感心した。塩田からの製塩作業を詠んだもの。「藻塩煮る」には歌語のなつかしさがあふれる。立秋への着眼も暑い夏の作業が楽になることへの期待があろう。

さよならはへばなと言へり暮早し 今野 晶子

節がやってくる。秋田は地貌季語の宝庫。魅力ある地だ。

吾は山の子熊啄木鳥の顔真つ赤 大澤 淳基

迫力がある。吾は海の子ではない、山の子。当然、海の子も暗示する。シンボルに「熊啄木鳥」を出し、紅潮した「顔真つ赤」は山の子の顔にも取れるのが巧みな表現である。

八木重吉忌一掬の秋の水 宮岡 光子

一九二七(昭和二)年十月二十六日逝去。三十歳。キーツが好きなきリスト教徒詩人の重吉。ギリシャ語で聖書を読んだという。南多摩(町田市)生まれ。自然詩人を思えば手で掬う秋の水との取合せがじんと心に沁みる。

初霜や掬めとらるる草の息 田中 利政

作者は詩人。自身を一本の草と見つめて、その草の息が自然の初霜にがらに掬め取られるという。透析のご苦労もある。半生の詩業の作品も含め句集を出す計画がすすめられている。柔軟な思考に感心する。

地球より重き吾子なり雪ばんば 塚本 回子

いわれているが、端的な吾子俳句。戦の兆しが世界に満ちる現今、未来ある子への思いは重い。綿虫の軽さではない。

冬ざれや息子は父の遺骨を負ひ 小湊美津子

句中の父は信州大学教授の小湊繁。優れた経済学者であった。人柄はやさしく愛された。作者の父は哲学者務台理作。戦後の思想界をリードしたヒューマニストとして名高い。繁先生の遺骨が東京の故郷へ息子に負われて帰る。先生の長い病床暮らしを思い、私はなにかほっとした。作者は熱心この

秋田方言「へばな」が可笑しい。信州では「あばな」という。勝手な連想では秋田の方が土俗の強さがある。「へ」(屁)でもひとつこいて、はいさいならという調子。短日も自然。

骨納めたたむふるしき式部の実 許勢 元貞

奥方を亡くされたとうかがっている。ともかく、一段落したのであろう。風呂敷は骨箱を包んだものとも比喩とも受けとれる。淡いむらさき式部の実が亡き人への追悼の思いを暗示している。心に沁みるかなしみはどうしようもない。

句座十歳ひかりを緝ぎ立冬へ 山田 一政

秋田「岳」句会を続けて十年。みんなまじめな秋田衆。地貌探求に徹する一政さん、遠藤靖子さんらを先頭に充実した句会を想像し声援を送り続けてきた。先年の堤保徳さん同行の男鹿半島めぐりの楽しさを思い返しながら。なまはげの季

今月の秀句

黄泉へゆく船に白百合積みて冬 久保美智子

前書「悼む一志貴美子さん」が付く。松本蟻ヶ崎高等学校の同期生であり、「岳」での親友であった。今月号はほかに貴美子追悼句が多い。「岳」の黒子に徹することを自認していた生き方を讃えた句が多い。中でも黄泉路への船の積荷に「白百合」は胸を打つ。これは貴美子句へ船底に白百合積まる十二月を本歌取り風に踏まえている。最高の時に逝去した一志貴美子さんは天上で微笑み、実は驚いているのではないか。

上ない誌友で、こつこつと投句を続けられている。

雪嶺集・前山集から推薦候補作をあげる。

髪切つて紙屋に寄つて神の留守	国見 敏子
新糞の温みよ市へゆく馬よ	西牧千恵子
新米にかどはかざるもかはらかに	川村 五子
枯蓮銃口空に向け眠る	高松 正明
鳥渡る道内炭の露天塚	後藤 行雄
護摩焚きし冬青空や茶笏塚	寺地 和子
爐落葉早密かなる芽拵へ	古屋 洸

「蟬の殻」への深い考察―殉教者の衣とは

殉教者の衣のごとき蟬の殻 岩井かりん

先年、拙句〈井月の村きさらぎの蟬の殻〉を金子兜太からご自分の「愛唱十句にあげる」と誉められ、ぽーっとしてか

今月の秀句

絵帆展帆了はりし港深む秋 有手 勉

帆船がすべての帆を広げることを見帆展帆という。例えば、横浜みなと博物館の名高い帆船日本丸は二十九枚の帆をすべてあげる。その手作業には百人ほどのボランティアの手伝いが必要という。私も一度出会ったことがあり、圧巻であった。毎年の一大行事が済み、港の秋も深まったという。明るい安らかな句に出会い読み手もほっとする。作者の一句にかけける思いが伝わる佳句である。

形容に愛情が籠る。共産党支配の人類の理想を表現したはずの国が権力国家に墮し、歴史を閉じざるを得なかった苦悩は余人の想像を超えている。よく耐え、無血革命により政権を移譲した叙句に感動する。どんなお星さまだろうか。

炭窯の中の屋敷や外は雪 重親 利行

炭焼人を句材にした出色の作。雪の日に炭窯の中で昼寝とは、これはすごい。なるほどそんなことができるのかと悠々たる出雲人の生き方に驚く。鮮やかである。

しんしんと霧のそこひや人を恋ふ 傳田 恂子

胸を打つ。これは真実の愛。雪の底ならば類想であるが、霧の底をしんしんと捉えたのは手柄。好きとはこのように。

どつかりと牧の雲古や秋日燦 北村 宣枝

隠岐の吟行詠という。隠岐島摩天崖は国賀海岸にある七キロにわたる海蝕の絶崖。地平は牛が遊ぶ牧場。「雲古」とは、これいかに。糞である。そこに秋の日が当る。余裕がいい。

生涯を脱落したる木の葉髪 岩上 諒磨

作者は三十歳。覚悟の一句と読み、胸に響いた。偉い坊様の道元ではないが、「脱落」とはなかなかいえないことば。

後の雛母とふ衣ぬぎにけり 添田 朋子

秋の雛祭。現今は春の雛祭が盛んであるが、古風を重視する名残を巧みに生かしている。母の意識のしがらみから自由になりたい。これはある時から女性の願望であろう。〈吾亦紅なくば花野のとのはず〉も佳句。

年の湯やシーラカンスは海の底 増田 義幸

古代からの化石のような魚「シーラカンス」へ、一年最後

ら、いつか二十年が経つ。このたび、掲句の名作に出会った。深い句だ。いわれて見ると、蟬は昆虫界の殉教者のごとし。地中に七年、地上に一週間とは、信仰心でもなければ生涯を耐えられないのではないか。蟬は「セミ教」でも信じているのか。蟬の殻を見て長崎や天草の殉教者の質素な衣装を思い浮かべたもの。

ホスピスの森や椎の実埋める栗鼠 塩原 英子

終末期医療のホスピス病棟がある森。静かに余生をおくる人たちがいる。冬越しの準備に栗鼠も心得ている。私が職業柄ホスピスの歴史を調べて講義をした昭和六十年代はホスピスとは珍しい聞きなれないことばであったが、今や関心が高まり俳句にも詠まれる。死生観などということばも当たり前に用いられている。医療の進歩は著しい。

十一月十一日行く雲へ愛国歌 満田 光生

「リメンブランス・デー」(Remembrance Day)は一九一八年十一月十一日、第一次世界大戦終結記念に、イギリスのジョージ五世により定められた記念日。「愛国歌」とはナショナルリズム一辺倒ではない。ヒューマニズムの芯に貫かれた愛国なのが胸を打つ。作者の句領域の広さにも共感する。満田光生の句柄が次第に出来上がりつつあるのが見え、たいへんうれしい。

ゴルバチョフ忌大岩石は星になり 芳賀 佳子

世界史上の名高い話題を詠んだ句が並び、我ながら驚いている。ソビエト連邦の最後の最高指導者ゴルバチョフ。逝去は二〇二二年八月三十日。九十一歳。「大岩石」とのごつ

の湯に沈みながら思い至ったのは見事な想像である。

重陽や琉球切子に首里の酒 渡嘉敷皓駄

北原白秋の琉球詠ではないが、沖縄恋しの思いをかき立てる。久しぶりに明るい南島沖繩の地貌に触れ、懐かしい。

青雲集

年寄にいづこも地べた秋祭 島田 謙吉

地べたへの親近感を詠む、いい句である。作者は九十一歳のちが込められ、実感が滲む。地べたに座り村芝居でも囃したてているのか。安らかな地べたよ。地べたこそ帰りゆくところ。

鱗雲夫婦はいつも弥次郎兵衛 岩見三七夫

拘らない。互いに自分の道を行きながらどこかでもちつもたれつ、バランスをとる。空のデザインは鱗雲。明るい。

満月や想へばそこにあることし 牧野真知子

円満な幸せな句である。品格がある。思い出し方が巧み。

佃煮の蝗の足の天を指す 松原壽美子

途方もないことを詠ってくださいました。炒られられないなごよ。甘茶仏は指もて天上を指しているが、いなごはか細い足をぴんと上げて魂の行く方を指すとは。

岳集・青雲集から推薦候補作をあげる。

糸瓜水女の顔を拵へる 武居香織留

一撮み香炉に茶の葉霜の夜 福田紫枝子

秋惜しむ夫とはしこの美術館 上岡 裕美